

平成21年度事業報告書

特定非営利活動法人 子どもデザイン教室

I 事業期間

平成22年2月22日～平成22年3月31日

II 事業の実施状況

I 特定非営利活動に係る事業

1. 子どもデザイン教室の運営事業

(1) 内容 児童養護施設の子どもたちが、イラスト、段ボールアート、マッチ箱絵本、粘土細工、フェルトアート、ぬいぐるみ、ポスター、キャラクターデザイン、シンボルマーク、アニメーションなど、様々なアートとデザインの創作活動を行った。

年少幼児から低学年の小学生までは、初歩的な造形活動で美術全般に親しんでもらった。低学年から高学年までの小学生では、美術、デザイン、コンピュータの基本を教えた。高学年の小学生から中学生までは、さらに高度なデザイン教育を実施し、より実践的な美術、デザイン、コンピュータ技能の取得をめざした。

絵の具やマーカー、パステルなどの画材を使った基礎的な造形活動と、コンピュータを使った実用的な技能習得活動を融合し、実践的で機能的な創作活動に取り組んだ。

レッスンの中に国語・算数などの基礎学習も取り込み、学力の向上にも努めた。

また、プレゼンテーションレッスンを通して、自らの意識を的確に伝える練習もした。

さらに、しつけ、マナーといった基本的な生活習慣も身に付くように配慮した。

これらの事業を円滑に行うためのコンピュータ機器・書籍を購入した。

(2) 期間 平成22年2月22日～平成22年3月31日 (永続事業)

(3) 場所 大阪市東住吉区南田辺5丁目20番15号

(4) 内容 児童養護施設児童へのデザイン教育

(5) 対象 児童養護施設に所属する未成年

一般家庭の高校生未満・一般家庭の高校生以上

(6) 回数 週2～4回 1回1～2時間

(7) 収入 49,350円

教材費 49,350円 (2月24,150円、3月25,200円)

(8) 支出 310,588円

講師謝金 80,000円 (2月40,000円、3月40,000円)

画材費 70,580円 (2月15,846円、3月54,734円)

備品購入費 160,008円

(外付けHDD2台23,600円・メモリスティック9,480円・基本ソフト34,521円・プリンタ複合機62,800円・ペンタブレット27,502円・手数料1,305円・書籍800円)

2. 書籍・web ページを活用した情報発信事業

(1) 方法 上記1.事業の内容や主旨を広報する様々な印刷物、パネル、看板、DVD、ホームページを制作した。主に印刷物は、東京、大阪の新聞・通信社、放送局、出版者、団体・協会、企業、マスコミ・ジャーナリストなどに配布した。このことで本事業の認知度をあげ、児童養護施設の現状の周知、社会参加の必要性、支援の依頼を行った。

(2) 期間 平成22年2月22日～平成22年3月31日

(3) 場所 大阪市東住吉区南田辺5丁目20番15号

(4) 発行部数 絵本A4×20P×1,000部・作品集A4×8P×1,000部・案内書A4×8P×1,000部・リーフレットA4両面×1,000部・挨拶状・便箋A4×3,000部・角2封筒×3,000部・洋0封筒×3,000部・パネルA1×4点・看板×2点・DVD編集5分・ホームページ13P・パンフレットA4×1,000部

(5) 収入 0円

(6) 支出 3,184,209円

通信費 172,960円 (2,162通×80円)

版下制作費 1,590,000円

絵本A4×20P 600,000円・作品集A4×8P 240,000円・

案内書A4×8P 240,000円・リーフレットA4両面 60,000円

挨拶状・便箋A4 15,000円・角2封筒 7,500円・洋0封筒 7,500円・

パネル240,000円・看板60,000円・報告書120,000円

製版校正費 13,000円 (絵本6,500円×2回)

印刷製本費 400,899円

絵本A4×20P 137,700円、作品集A4×8P 65,100円、

案内書A4×8P 63,479円、リーフレットA4両面 15,880円、

挨拶状・便箋A4 16,880円、角2封筒 24,631円、洋0封筒54,940円

看板22,289円、

DVDムービー制作費 310,500円

編集5分 300,000円、ナレーション10,500円

ホームページ制作費 337,230円

制作費13P 315,000円

サーバー代 22,230円 (初期費用5,250円+月額料16,380円+振込手数料600円)

アルバイト賃金 292,400円 (5人)

アルバイト旅費 19,220円 (1人)

報告書執筆謝金 48,000円 (6,000円×8P)

※上記事業以外は、実施なし

III 社員総会の開催状況

第2回通常総会

- (日 時) 平成22年3月5日 19時～21時
(場 所) 大阪市東住吉区南田辺5丁目20番15号
(社員総数) 11名
(出席者数) 4名(うち委任状出席者0名、書面表決者0名)
(内 容) 平成21年度事業の反省
平成22年度事業計画について
会費の変更について
審議の結果、全員一致で可決承認

IV 事業報告書

1 はじめに～設立までの経緯

2002年より大阪市立扇町総合高校と大阪市立デザイン教育研究所でデザインの授業を受け持っていた私は、ここで子どもデザイン教室を誕生させるきっかけをえる。それは毎年、多くの高校生が決まって口にする「どうせ私なんて」という自暴自棄の声。それと高校生が恐ろしく固定概念に縛られていて、発想力や想像力がなく、カチカチに頭が固いことである。私は直感する。「高校生からデザインを教えていたのでは手遅れだ」と。もちろん高校生でも努力すればいくらかでも能力は改善する。しかし、それには相当の時間と膨大な努力を要する。テレビゲームで育ったカチカチのスポンジにはなかなか水は染みこまないのである。「もっと小さい頃からデザインを教えないと」そう考えるようになった。

デザインという思考法は、国語、算数などと同じ、幼少期より会得しなければならない基礎学力の一つだと私は考えている。デザインを平たくいうと「相手の立場に立って物事を考えること」である。こうした習慣、考え方が現代社会には欠如しているから社会が何か殺伐としていて、その歪みが様々な社会問題を引き起こしているのではないだろうか。

デザイン教育の必要性を強く感じた私は、2007年に子どもデザイン教室を設立する。しかも両親と一緒に暮らすことできる子どもではなく、両親と一緒に暮らすことができない児童養護施設の子どもの達に教えることにした。その理由は、児童養護施設の子どもの達の進学や就職先が、そうでない子ども達に比べて劣るからである。原因は愛情の不足である。愛情の不足は学力の不足や精神の不安定などの様々な問題を引き起こす。一人っ子の場合、2人の親が愛情を注ぐ。200%の愛情である。児童養護施設の子どもの達は、一人の保護者が複数の子ども達に愛情を注ぐ。6人のグループホームの場合、16.6%の愛情になる。私は「幸せになる権利があるのに、幸せになりにくい子ども達に、社会の一員として私にできることは何か」を考えたのである。

私は、近郊の社会福祉法人師恩学園と社会福祉法人聖家族の家へ赴き、当初5名の子どもさんに、月曜日と土曜日のレッスンからはじめた。現在は総勢33名の子ども達にデザインを教えている。

2 デザインとは？

デザインとは「ある目的を達成させるために、最も効率のよい方法を企画・計画する力」のことである。デザインとは、作り手と受け手の間にあるものと考えていい。例えばコップをデザインする場合、どんな大きさ、形、重さ、素材、色にするのか、使い手の立場に立って、また、作り手の思いや経済性を考えて企画・設計される、これがデザインである。それが視覚伝達ならビジュアル、工業製品ならプロダクト、空間ならインテリア、服飾ならファッション、他にも広告、映像、建築、環境、様々なデザインの領域がある。

よく聞かれる質問だが、デザインとアートとの違いは、例えば先のコップの場合、もしこれがアートであるなら、作り手の経済性や使い手の使いやすさは考えなくていい。作り手の思い、これが全てであり、それがアートである。

また、アートの場合、作品だけでなく作家自体の人格や歴史を含めて作品になる。他方、デザインにはデザイナーの人格や歴史に意味はない。デザインの行為のみに価値がある。もちろん有名デザイナーは存在するが、本来、匿名性のあるものである。

これもよく聞かれる誤解だが、デザインとは絵を描くことではない。デザインとは「最も効率よく目的を達成させるための方法」であるから、文字を使って説明するより、簡単に絵を使って説明されるケースが多い。そこで「デザイン＝絵」という構図が出来上がり、誤解が生まれる。子どもデザイン教室は、絵を上手に描く方法を教える教室と思われがちだが、私は絵の上手な描き方を教えているのではない。正直、私自身、絵が上手でない。私は「最も効率よく目的を達成させるための方法」を教えているのである。もちろん、それは絵やコンピュータを使って表現される場合が多いので、上手に描く方法は教えるが、それは二次的なことである。

私は22歳でデザイン会社を創業し、27年間デザイン界で仕事をしている。会社の平均寿命が10年といわれることから、経営に成功した方といえるだろう。この成功体験、成功手法を子ども達に伝えたい、そう考えた。デザインという「最も効率よく目的を達成させるための方法」を毎日練習、習慣づけることで、これを日常生活、学習、進学、就職、ひいては将来の人生設計にも役立てほしいと考えた。

余談ではあるが、私はデザインの勉強法を自ら開発して2008年に大阪市立大学商学部を受験し、予備校に通うことなく独学で合格した。これはデザイン的な物事の考え方の有効性を自ら立証したものと自負している。

3 総合所見

私は子ども達に多様な生き方があることを伝えたいと考えている。企画、設計というデザインの本質を小さい頃から学ぶことで、普段の生活や勉強を計画して実行することを習慣づけ、進学率を高め、より多様な就職先を見つけ、また日々の暮らしのセンスやちょっとした技術をつけて、よりよい生活を送ってほしいと願っている。一人一人がよりよい生活を送ることでよりよい社会が実現する。先人として、また社会人として、そう願うことは当然の責務である。

児童養護施設の子どもの多くは、18歳で施設を出て一人で住まなければならない。若者の若年齢化が指摘される昨今、両親と住むことのできない子ども達に独立を余儀なくするのは相当過酷なことである。いうまでもないが、愛情の不足は学力の不足と精神の不安定に直結する。子どもの多くは学力や資金力の不足から、大学進学が困難で、男の子の

場合は日雇い大工、女の子の場合はパチンコ屋の住み込みというのが典型的な就職先である。周辺の間人関係も憂慮すべき状態にある。社会や親への反抗心から自暴自棄になったり、非行、犯罪に走るケースも数多い。

虐待や育児放棄を受けた子ども達が大人になって子育てをする際、再び虐待や育児放棄を繰り返すといった負の連鎖も指摘されている。私たちはこうした負の連鎖を断ちたい、よりよい社会を築きたいと考えている。

児童養護施設の子どもの半数以上は、虐待や育児放棄の経験がある。心に傷を負った子ども達は、精神的に不安定で、心のケアが必要である。しかし、児童養護施設で一般家庭のような愛情を注ぎ、一人前の社会人として教育することは物理的に困難である。こうした子ども達が18歳で施設をでて自立する場合、子ども達は相当厳しい現実と直面する。生活が困難でホームレスになるケースさえある。愛情の不足は非行、犯罪の原因なのである。

こうした問題を解決するために、行政だけでなく、私たち企業人、地域社会の福祉へ参加は当然の責任である。私はこうした観点から児童養護施設の子どものために長期的にデザインを教えている。子どもたちが幼少期より「自らの将来を企画・設計する力＝デザイン力」を身につけることは大変意義があると確信している。

通常、企業人、経済社会、産業界は経済活動をしている。産業活動と福祉活動とは個別の次元で考えられる。しかし、産業界に直接、具体的に福祉事業ができないのだろうか、また今、日本はそういう状況になりつつあるのではないだろうか？

少子高齢化やグローバル化によって、日本の産業や社会が疲弊していく中で、単に経済目的だけで、この社会は成り立たなくなってきている。産業界が社会の主体である個人にどれだけの貢献ができるのか、営利目的だけでなく、いかに豊かな時間を共有できるのか、そんなことを考える時代の到来であると考えている。私たちは、こうした取り組みが第一次産業から第三次産業まで、あらゆる産業で可能であると考え、その先鞭として当事業に取り組んだ。また、子ども達が職業を通して社会を見ることは、反って国語や算数などの基礎学習の重要性を気づかせる重要な役目も担っていると考えている。

血縁に関係なく次世代を育てるのは先世代の義務である。もともと日本はそういう社会ではなかったのだろうか？しかし、現状はこうした本来、社会や地域が持っていた機能や楽しさを忘れ、多くの人は経済活動だけに没頭している。

例えば私はグラフィックデザイナーである。私は社会で培ってきたノウハウを子ども達に伝える。魚屋さんは魚屋さんのノウハウを、散髪屋さんは散髪屋さんのノウハウを伝えればいい。それぞれがそれぞれの得意分野で地域社会に貢献することは、これからの時代の要請である。

私は行政ではできないことを、デザインの専門家として子ども達に提供したいと考えている。子ども達のなかには明らかに天才的な素養のある、きら星のようなスターがいる。こうした才能も放置しておく社会の中に埋もれてしまうかもしれない。もしかするとその子は天才的な魚屋さんになるかもしれない。天才的な散髪屋さんになるかもしれない。こうした才能を大人や社会の事情で挫折させることなく、大切に育てていかなければならないのではないだろうか？

私は、こうした有能な才能を見捨てざるを得ないこの社会を憂う。セーフティネットの網からこぼれ落ちそうな子ども達に社会全体が光を当て、逆に自らが眩しく輝き出す各界のスーパースターになってほしいと願っている。

4 事業内容

子どもデザイン教室では、社会の第一線で活躍するデザイナーが講師を勤め、児童養護施設の子ども達にデザインを教えた。年少幼児から低学年の小学生までは、初歩的な造形活動で美術全般に親しんでもらった。低学年から高学年までの小学生では、美術、デザイン、コンピュータの基本を教えた。高学年の小学生から中学生までは、さらに高度なデザイン教育を実施し、より実践的な美術、デザイン、コンピュータ技能の取得をめざした。レッスンは、デザインやイラストを描くだけではなく、ぬいぐるみや粘土など、様々な画材に触れ、美の世界を広げた。

私はデザインなどの創作活動にヒーリング、癒し効果を感じた。信じられないくらい過酷な経験をした子ども達が、創作活動を通して心静かな時間を過ごすことは、かけがえのない貴重な体験だった。このことにより子ども達の内情が安定し、自信を持ち、将来に対する希望や可能性を見いだすことができたなら、これに勝ることはない。また、プレゼンテーションレッスンを通して、自らの意識を的確に伝える練習もした。子ども達は失敗を恐れる。恥ずかしがり屋でもある。自分の意見をいうことが大変苦手である。また、否定の言葉は数多いが、理由の説明や物事を文章として言葉にすることはできない。例えばこんな典型的な会話が繰り返される。

子ども「(横柄に) はさみ!」、私「はさみがどうしたん?」、子ども「はさみとって!」こうした基本的な会話習慣、しつけやマナーには骨が折れるが、一つ一つきちんと対応しないとイケない。

ここで2月、3月の活動内容を報告する。

2月 新しいホームページを開設。中学生は「星の王子さま」を読んで、その表紙のデザインをする。全員でペンギンの粘土作りをする。個性的なペンギンが勢揃いして圧巻。中学生は美術系高校に進学希望なので、受験用デッサン教室を開催。この頃から際だってコンピュータを多用しだす。大阪市立デザイン教育研究所で展示会を開催。絵本とパネル展示で活動をアピール。NPOに認可される。ホワイトボードに落書きをさせて発言させる方法を考える。無意識のプレゼンテーションの練習になる。特定曜日があんまり騒がしいのでその対応を講じる。

3月 粘土スタンプや穴あけ器を使って春のポスターを作る。独創的なアイデアが面白い。コンピュータで文字打ちするなど、文案作りもする。3年かかったアニメ大作「ブーとウーのうんこの物語」完成。子ども達に環境問題を考えてもらった。中学生は児童虐待の記事を読んでポスターを作る。設立時からの子どもが親戚の家に引き取られることになった。いいことなのに寂しい。子ども達の心の中を知らないといけない。オリンピックや漫画などの身近なモチーフで模写を続ける。自由発想の落書きボードが活躍している。しつけやマナーにも注意を払う。中学生が全員、希望の美術系高校に合格、嬉しい。どの作品も最後まできちんと仕上げることにこだわる。DVDの録音作業をする。

このように、毎日どのようなレッスンをすればいいか内容の企画、試行錯誤を繰り返した。今年度は多人数が同時にレッスンを行うために、コンピュータや画材など設備の充実が図れた。これもすべて福祉医療機構様のおかげである。感謝したい。

広報物の製作チームは、協力会社、デザイナー、イラストレーター、カメラマン、デザイン学生で構成されたメンバーで、絵本、作品集、ご案内、リーフレット、挨拶状・便箋、封筒、看板、パネル、DVD、ホームページを企画、製作した。その後、新聞・通信社、放送局、出版社、研究機関、各種団体・協会、企業、マスコミ・ジャーナリスト、芸能・音楽関係者に広報物を配布した。

5 事業成果

はじめは落ち着きのなかった子ども達が、次第に集中してレッスンに取り組むようになり、徐々に会話能力や計画的に実行する力を身につけた。1年もたてばその技能の向上は目を見張るものがあった。この成果が一番嬉しい。今回の事業が団体の組織に与えた影響は、若い世代が想像以上に力を発揮し、団結して取り組めたことである。本事業ではここに従事するスタッフの育成も重要な課題である。そういう意味で若い世代が集い、目標に向かって一丸となり、また、新しい技能を発揮させたことは素晴らしい成果の一つである。

新たな発想の芽は、子ども達を将来のスターに育てようという考え方が生まれたことである。具体的には子ども達の作品を、海外のアート・デザイン界に発信することである。現在、ニューヨークのキックスターターというアート団体に子ども達の作品を提供する計画を立てている。

予想しなかった効果は、デザインにもアートと同じ、癒し、ヒーリング効果があることを認識したことだ。信じられないくらい過酷な経験をした子ども達が、デザイン活動を通して心静かな時間を過ごすことはかけがえのない貴重な体験であった。最初はガサガサと落ち着きがなく、言葉遣いや行動も荒れて乱暴な子ども達も次第に心静かになり、ゆとりが生まれてきた。子ども達の変化を定点観測していると、子どもたちの能力は私が想像するより遙かに優れていた。改めてその能力に新鮮な驚愕を実感した。

どんな作品もその完成には周到に計画して実行しないとうまくいかない。デザインは心の静寂と精神の集中力を子ども達に要求する。デザインの行為はどこか書道にも相通じている。児童養護施設の子どもの絶望的な経験に対して、幸せに育った私にはその過酷さが実感できない。そのため当初、騒いだり、いうことを聞かない子ども達を頭ごなしのしかる場面があった。しかし、それは大きな間違いであり、逆にだからといって甘やかすこともいけない。そこで私が考えた新しい子ども達との接し方は、子ども達をスターと考えることだ。事実、子ども達は社会に巣立っていくスターである。どんな世界に巣立つかは分からないが、どの世界でもスターになってほしい。そう考えると、子どもだからと頭ごなしに怒ってしまうようなミスもなくなる。このように、この一年間、子ども達との様々な葛藤を通して私自身も大きく成長した。

また、当事業で製作した絵本、作品集、ご案内、リーフレット、挨拶状・便箋、封筒、看板、パネル、DVD、ホームページを使った広報活動により、子どもデザイン教室に関心をよせる企業、団体、地域の市民が徐々に増えてきたのも収穫の一つだ。

6 今後の課題

私は広く企業、団体、市民に子どもデザイン教室の活動を広めるため、多くの広報物を製作し、配布した。その反応を掘り起こし、目覚めさせ、大きな幹に育てていくのは、これからの私の使命である。しかし、企業、団体、市民の反応が薄く、腰は重い。猜疑心もあろう。こうした不安や不審を払拭するのは、実績や認知度の向上が必要である。本事業をさらに分かる形にしていかなければならない。これからさらなる広報活動は必須である。

福祉医療機構様のおかげでコンピュータや画材の充実など体制は整った。私の使命は、児童養護施設の子どもの長期的なデザイン教育である。デザイン能力の取得は幼少期よ

り青年期まで長い時間が必要である。途中で止めるわけにはいかないし、この活動はまだ始まったばかり。私はより多くの時間を提供しなければならない。そのためには安定した運営は欠かせない。運営経費の問題はおそらく永遠の課題だろう。

子どもデザイン教室には、児童養護施設からの参加希望者が多い。私もさらに多くの子ども達を受け入れたいと願っている。しかし、現状のスタッフの員数でレッスン内容の企画、試行、準備、実施、片付け、検証、記録、保存の業務を遂行することは困難である。膨大な作業をサポートするアルバイトスタッフの補助は不可欠である。

今後は長期的な運営安定のため、幼稚園、保育園などで行う出張子どもデザイン教室や、アートイベントの開催（展覧会を開き、活動を広報する）など、活動手法を検討したい。

7 おわりに～これからの構想

今後の第一目標は児童養護施設の子どもの数を増やすことだ。そして、子どもデザイン教室を終日解放し、いつ来てもいい、子ども達の拠り所となる場所にあることである。子どもデザイン教室では様々な施設の子子ども達も受け入れ、職と学が一体となった新しい形の寺子屋をめざしている。

私たちの最終的な目標は子どもデザイン教室が里親グループホームとなり、より深い社会的な福祉活動にすることである。さらに子どもデザイン教室のノウハウを公開し、日本のあちこちで地域や社会全体が子どもを育てる方法を全国に広めていきたい。

平成22年3月31日

特定非営利活動法人 子どもデザイン教室
理事長 和田 隆博